

極秘

山縣元帥用

帝國國防方針、國防ニ要スル兵力及
帝國軍用兵綱領策定顛末

0006

[illegible]

0006

帝國國防方針、國防：要スル兵力及

帝國軍用兵綱領策定顛末

明治三十七八年戰役ニハ大本營ヲ統率シ給ヘル
先帝陛下ノ御指揮悉ク機宜ニ合シ陸海軍ノ
協同動作此ノ遺憾ナカリシト雖モ此事クル迄モ
平時ヨリ豫メ熟議セラレテリレニ非サルヲ以テ山縣
元帥ハ深ク將來ニ恐レル所アリ戰後兵備ノ擴張
ヲ策スルニ方リテハ陸海軍協同作戰ノ計畫ヲ立テ
以テ兩者ノ分擔任務ヲ定ムルヲ以テ第一ノ急務ナ
リトシ持テ日英同盟協約ヲ更新シ兩國當局者
ニ於テ軍事行動ニ関レ熟議ヲ為スヘキノ約アル
ニツキテハ益々我陸海兩軍協同ノ作戰計畫ヲ
立ツルノ緊急ナルコトヲ顧慮シ列國ノ形勢ニ稽

0007

一將來豫想スヘキ敵國ヲ列舉シ我作戰計畫ニ
於テ第一ニ敵トスヘキモノハ露國ニシテ之ニ亞ラモ
ハ清國トシ一々其關係ヲ述ヘ其何レニ對スル
ニ拘ハラズ我國防ノ本領ハ陸海兩軍、誠實ナ
ル協同ニ依リ、攻勢作戰ヲ為レ萬已ムヲ得
サル場合ニ非レハ守勢作戰ヲ為スヘキニ非ル旨ヲ
披瀝シ日本帝國國防方針私案ト名付テ明治
三十九年十月之ヲ闕下ニ伏奏セリ
先帝陛下ハ之ヲ査閱シ給ヒラル後元帥府ニ下シ
テ諮詢シ給ヒ各元帥ハ仔細ニ之ヲ講究シ其ノ
軍國ニ適切ナルヲ認メ且ツ戰後我國防線カ遠
ク大陸ニ伸張シ我軍往時ノ兵力ヲ以テレテハ能
ク帝國干城ノ大任ヲ全フスルヲ得サルノミナラス

0008

陸海兩軍密接、協同動作、依ル、非レハ絶海
防備、成功ヲ期シ難キ、ヨリ宜シク先ツ帝國
國防方針ヲ定メ、兼テ陸海作戰ノ策應ヲ密ニ
セサルヘカラス、加之日英聯合作戰、関スル會
商ノ基準ト為ストメ、モ亦其必要アルヲ以テ前
記國防方針草案ヲ參謀總長及海軍軍令部
長ニ下附シテ參考トナサレメラル、陸海協商シテ以
テ帝國國防方針ヲ立案セシメラル、タキヒヨリ復奏
セリ茲ニ於テ明治三十九年十二月二十日參謀總長及
海軍軍令部長ハ勅命ヲ拜シ帝國國防方針策
定ニ関スル商議ヲ開始スルニ至レリ
明治四十年二月一日ニ至リ參謀總長及海軍軍令部
長ハ連署シテ嚮キ、御下問アラセラル、日本帝國

0009

ノ國防方針ニ関シ 聖旨ヲ奉シテ審議ヲ盡シ
タル結果帝國國防方針、國防ニ要スル兵力、帝國
軍ノ用兵綱領ヲ左ノ如ク策案シテ之ヲ奉呈シ併
セテ國防方針ハ政策ニ至大ノ關係ヲ有スルヲ以テ更
ニ之ヲ内閣總理大臣、御下附アラセラル審議セ
シヲテ度又要スルハ國防ニ要スル兵力ヲ内閣總理
大臣ニ覽覽セシメテ度旨ヲ奏上セリ

○帝國國防方針

一帝國ノ政策ハ明治ノ初ノニ定メラレタル開國進
取ノ國是ニ則リ實行セラレ曾テ其軌道ヲ脱
シタル事無キハ論ヲ俟タル所ニシテ今後ハ益
北國是ニ從ヒ國權ノ振張ヲ謀リ國利民福
ノ増進ヲ勉メサルヘカラス

國權ヲ振張シ國利氏福ヲ増進セント欲セハ世
界ノ多方面ニ向テ經營セサル可カラスト雖モ就
中明治三十七八年戰役ニ於テ幾萬ノ生靈及巨
萬ノ財貨ヲ抛テ滿洲及韓國ニ扶植シタル利權
ト亞細亞ノ南方竝太平洋ノ彼岸ニ皇張レツッ
アル民力ノ發展トヲ擁護スルハ勿論益ニ之ヲ擴
張スルヲ以テ帝國施政ノ大方針ト為ササルヘカラス
果シテ然ラハ帝國軍ノ國防ハ此國是ニ基ク所
ノ政策ニ伴フテ規畫セラレサルヘカラス換言スレハ
我國權ヲ侵害セントスル國ニ對シ少クモ東亞ニ在
リテハ攻勢ヲ取り得ル如クスルヲ要ス
ニ我帝國ハ四面環ラスニ海ヲ以テスト雖國是及政
策上其國防ハ固ヨリ海陸ノ一方ニ偏スルヲ得ス

況ンヤ海ヲ隔テテ滿洲及韓國ニ利權ヲ扶植シテ
ル今日ニ於テオヤ故ニ一旦有事ノ日ニ當リテハ鳴
帝國内ニ於テ作戰スルカ如キ國防ヲ取ルヲ許サス
必スヤ海外ニ於テ攻勢ヲ取ルニアテサレハ我國防ヲ
全フスル能ハス

三帝國軍事上ノ歴史ヲ闡スルニ往昔ヨリ今日ニ至ル
マテ退嬰ノ主義ヲ取リタルハ徳川時代ノミ其他
ハ皆進取的ナラサルハナレ乃々近々明治二十七八年
同三十三年及同三十七八年戰役ニ於テハ悉ク攻勢ヲ
取リテ以テ戰局ノ大捷ヲ占メ得タリ此歴史ハ日
本人ノ性格ヲ明ニ表證スルモノニレテ他日再ヒ干
戈ヲ動カスノヒムヲ得サルニ當リテモ亦此性格ヲ
益々發揮スル如クセサルヘカラス蓋シ國民ノ性格ニ背

ク戦法ハ古来其良成績ヲ得タルコト稀ナリ

四國防ヲ策定セントスルニハ須テ先ツ我敵手タルヘキ
モノヲ想定スルヲ要ス

我國是ニ從フ所ノ政策ヲ遂行スルニ當リ之ニ對シ
一國利害ノ關係上樽俎ニ依リテノミ其解決ヲ
見ル能ハサルハ論ヲ俟タサル所ナリ然ルニ露國ハ明
治三十七八年ノ敗戦後國內ノ大紛擾アルニモ拘
ラズ戦役前ニ於ケルヨリモ尚優勢ノ兵力ヲ極東ニ
配置シ且ツ沿黑龍鐵道ノ布設ヲ計畫シ又營々
トシテ海軍ノ再建ヲ謀リツツアリ是レ他日機ノ東ス
ヘキアレハ報復戦ヲ敢テシ滿鮮ニ於ケル我利權
ヲ侵害シ以テ數百年來ノ國是ヲ貫徹セント欲ス
ルモノニ非スレテ何ソヤ故ニ最モ近ク有リ得ヘキ敵

國ハ蓋シ露國ナルヘシ

米國ハ我友邦トシテ之ヲ保維スヘキモ、ナリト雖モ
地理、經濟、人種及宗教等ハ關係ヨリ觀察ス
レハ他日劇甚ナル衝突ヲ惹起スルコトナキヲ保セス

清國ハ滿韓ニ於ケル我利權ニ對シ利害ハ關係ヲ
有スルコト大ナリト雖モ清一國ヲ以テ單獨我ト戰
ヲ交ユヘシトハ殆ント想像シ得サル所ナリ如何トナ
レハ清國ハ殆ント全ク海軍ヲ有セス其陸軍ノ如キモ
亦名アリテ實ナキニ等シケレハナリ是レ清國ハ根本的
改革ヲ斷行シ而カモ尚ホ幾多ノ星霜ヲ經ルニ
アラサレハ健全ナル軍國タル能ワサル所以ニシテ周環
列國ノ視線ヲ等シタスル所ナルヘシ清國ノ國情此
ノ如クナルニモ拘ラス我ニ對シテ單獨ニ戰端ヲ開カ

0014

シカ我ハ必勝ノ算ヲ以テ之ニ當ルヲ得ヘシ既ニ我ニ
必勝ノ算アラハ誰カ之ニ對シテ起ツモノアランヤ然
レトモ清國內ニハ近時利権回收、排外、革命等ノ
暗流奔騰シアルヲ以テ何時勃發シテ團匪事件
ノ如キ變亂ヲ生スルヤモ測ラレス之ニ應シテ取ルハキ
我帝國軍ノ処置ハ列國トノ關係上頗ル複雑ナ
ル問題ニ屬スルヲ以テ豫メ之ヲ策定シ置ク能ハサ
ルヘシ

一國ト一國トノ關係ハ前述ノ如ク夫レ然リ然レトモ日
英同盟新協約締結ノ結果同盟ヲ以テ同盟ニ
對スル關係ハ列國利害ノ繫ル所何時戰端ヲ開
クノ動機ヲ惹起スルヤ測ラレサルモノアリ是レ帝國
ノ國防ニ重大ナル關係ヲ及ホスモノニシテ慎重ナル考

慮ヲ要ス

日英同盟新協約ヲ研究スルニ英露露ヲ開クニ
方リ其戦争ノ發源東亞及印度ハ勿論其以外何
レニ在ルモ我ハ常ニ起テ英國ヲ援助スルノ義務ヲ
生スヘキモノト覺悟セサルヘカラス如何トナレハ英露
開戦ニ當リ戦争ノ基源孰レニ在ルヲ問ハス露國
ハ隨意ニ印度ニ向ヒ威壓ヲ加ヘ得ヘク從テ我ハ直
ニ協約上ノ義務ヲ負擔セサルヘカヲサルニ至ルヘケレハ
ナリ

又方今歐洲ノ形勢ヲ觀察スルニ獨國ハ新銳ノ勢
カラ以テ商工業上ハ勿論海軍力ニ於テモ英國ニ拮
抗セントスルノ概アリ是レ英國ノ決レテ輕々ニ看過
スル能ハサル所ナルヘク加之「バグダッド」鐵道ノ經營並

ニ土耳其、波爾斯：於テ爾英獨露ノ關係等何時
其衝突ヲ惹起スルヤモ測ラレス果シテ其衝突ヲ現
實ニスルコトアランカ獨國ハ露國ト手ヲ携ヘテ起ツコト
ヲ謀ルナルヘク其結果我モ亦起テ日英同盟ノ義
務ヲ分擔セサルヘカラサルニ至ルヘシ而シテ此同盟ハ我國
防上帝國軍ノ用兵ニ影響有リ及ホスコト頗ル大ナリ若
シ露獨同盟スルニ至ランカ獨國ノ兵ヲ以テ東亞ノ戰
地ニ派遣ムカ如キコトハ之無カルヘシト雖モ露國ハ西方國
境ニ顧慮スルコトナク東亞ニ作戰スル兵力及鐵道、
最大力ヲ使用スルヲ得ヘク其他武器、糧食、材料
並戰費等ノ補給ニ於テ偉大ノ利益ヲ戰爭ニ賦
與スルヲ得ヘク又海上ニ於テモ多大ノ戰勢ヲ發展ス
ルヲ得ン故ニ國防上ノ見地ヨリスレハ我國ノ外交政

策ハ露獨ヲシテ同盟セシメサル如ク調理セラルルヲ必
要トス然レトモ獨國目下、海軍ハ假令露國ト同盟
スルモ尚日英同盟ノ海軍ニ對シ有利ナル戰ヲ為ス
ノ算アリト認メ難ク從テ獨國ハ其東西洋ニ跨カル
洪大ノ利益ヲ抛擲シテ迄モ敢テ起ツヤ否ヤ是レ外
交上利害ノ緩急ヲ策スルノ好資料トシテ帝國政
府ノ常ニ注意スヘキ要件ナランカ

日露再ヒ戰場ニ相見ルノ秋ニ於テ清國若シ我ニ聯
合センカ我軍ノ享有スヘキ作戰上ノ利益即チ物資ノ
供給及後方勤務ノ便易等ニ於テ實ニ偉大ナルモノ
アラン是レ明治三十七八年戰役ニ於テ清國カ稍ニ好
意的中立ヲ保タルニ於テスヲ尚且經驗シタル所ナリ
故ニ清國若シ露國ニ聯合センカ彼我利害ノ關スル

所當サ、之ト正反對ナラサルヘカラス是レ露國ノ夙ニ
洞見スル所ナルヘク從テ彼ハ外交政策上有事ノ日ニ
當リ清國ヲレテ露國ニ聯合セシムルコトヲ謀ルハ自然
ノ勢ナリ故ニ我外交政策ハ露清聯合ヲ成立セシメ
ス反テ清國ヲレテ依然我ニ好意ヲ表セシムル如ク
調理セラルルヲ要ス然レトモ日英ノ同盟ヲ以テ露
清ノ聯合ニ對抗シ得ヘカラスト云フハアラサルナリ況ン
ヤ日英同盟ノ海軍ハ露清同盟ノ海軍ニ比シ著シク
優勢ヲ占メ得ヘキニ於テオヤ
露佛同盟ノ活動範圍ハ蓋シ主トシテ歐洲ニ局限
セラルヘク又英佛海上勢力懸隔ノ現況ト佛ノ陸
軍ヲ以テ滿洲方面ノ作戰ニ直接行動ヲ為ス能ハ
サル事情トヲ鑑ミ且近時英佛兩國間ニ於ケル

親近ノ情勢ヲ考察スル時ハ佛國タルモノ自カラ進
シテ東亞ニ於ケル露國ノ活動ヲ援クルカ如キハ蓋シ
稀有ノ事タルヘシ然レトモ由來露國ハ苟モ自利ノ
為ニハ他ノ利害ヲ顧ミサルノ手段ニ出ツルコト過
激ノ戰役ニ於テモ屢々經驗セルトコロナレハ他日
露國有事ノ曉露國カ安南沿岸ノ港灣ニ占據シテ
以テ浦塩斯德ノ地理上ノ不利ヲ補ハントスルカ如
キハ蓋シ有リ得ヘキ事ニ屬ス露國ノ策果シテ此
ニ出ツルニ於テハ佛國ハ已テ得スレテ起ケ茲ニ東
亞ニ於ケル露佛同盟ノ活動ヲ現出スルニ至ルヘシ此
同盟ハ露獨同盟ト等シク帝國ノ國防ニ重大ノ影
響ヲ及ボスヲ以テ我外交當局者ノ深ク留意ス
ヘキ所ナランカ

若シ夫レ數國聯合ノ場合ヲ顧慮シ之ニ對シ悉ク
本國防方針ニ從ヒ兵力ヲ養フハ一國ノ能ク堪エ
ル所ニアラサルナリ於是乎外交政策ノ調理ニ依リ
敵ノ聯合ヲ破リ我同慶與國ノ同盟ヲ締結スル
ノ要益ニ失ナラン

其右ノ如ク論シ来ル時ハ帝國軍ノ兵備ハ左ノ標準ニ
基クヲ要ス

陸軍ノ兵備ハ想定敵國中我陸軍ノ作戰上最モ
重要視スヘキ露國ノ極東ニ使用シ得ル兵力ニ對
シ攻勢ヲ取ルヲ度トス

海軍ノ兵備ハ想定敵國中我海軍ノ作戰上最モ
重要視スヘキ米國ノ海軍ニ對シ東洋ニ於テ攻勢
ヲ取ルヲ度トス

0021

若シ夫レ露國ノ極東ニ使用シ得ヘキ陸軍ノ全兵
力ヲ計算シ之ニ匹敵スル我陸軍ノ兵力ヲ養ハント
スルハ我國刀ノ能ク堪ユル所ニアラス之ヲ補フ為メ
ニハ海上交通及滿洲ニ現在スル交通網ヲ益ニ發
達スルハ勿論滿韓ニ新ニ交通線ヲ施設經營シ
且ツ韓國北關地方ニ防禦陣地ヲ構成スルノ必要
アルヘシ
黃海ニ於ケル海上輸送ハ情況ニ因リ安固ヲ缺クノ
虞アルヲ以テ韓國縱貫鐵道並義奉鐵道ヲシ
テ滿洲ニ於ケル作戰軍ノ主ナル交通線ヲラシムル如
ク可成速カニ經營セラルルヲ要ス
六以上述フル所ヲ綜合スレバ左ノ要旨ニ歸ス
甲、帝國ノ國防ハ攻勢ヲ以テ本領トス

ハ、將來、敵ト想定スヘキモノハ露國ヲ第一トシ米、
獨、佛、諸國之ニ次ク

日英同盟ニ對シ起リ得ヘキ同盟ハ露獨、露
佛、露清等トス而シテ日英同盟ハ確實ニ之ヲ
保持スルト同時ニ務メテ他ノ同盟ヲシテ成立
活動セシメサル如クスルヲ要ス

丙、國防ニ要スル帝國軍ノ兵備ノ標準ハ用兵上最
モ重要視スヘキ露米、兵力ニ對シ東亞ニ於テ攻
勢ヲ取り得ルヲ度トス

○國防ニ要スル兵力

日本帝國ノ國防方針ヲ遂行スル爲メハ國防ニ要スル
兵力ヲ別冊、如ク修正備セラルルヲ以テ適當ト認ム

(別冊)

陸軍

曩、陸軍大臣ト共、内奏セシ平時常設ノ二十五師
團完成後十七年（兵役年限）ニ於テ戰時整備
シ得ヘキ帝國陸軍ノ諸部隊概テ左ノ如シ

一 野戰部隊

一 軍司令部

若干

二 野戰師團

二十五個

三 豫備師團

二十五個

四 騎兵旅團

五個

五 野戰砲兵旅團

六個

六 山砲聯隊

六個

七 重砲兵旅團

四個

八 野戰電信隊

若干

0024

九、右：適應スル兵站諸部隊及所要、重架橋縱列

二、攻城部隊

攻城、為ノ：要スル諸機關及徒歩砲兵隊若干

三、後備部隊

一、後備歩兵大隊 一百個

二、後備騎兵中隊 二十五個

三、後備野戰砲兵中隊(野砲)二十五個

四、後備工兵中隊 二十五個

四、守備部隊

一、要塞部隊 十五個

二、對馬警備隊

三、臺灣守備隊

四、樺太守備隊

0025

五、特種部隊

一、鐵道旅團

一個

二、氣球隊

一個

三、軍樂隊

若干

四、鐵道船舶輸送、關スル諸部及野戰軍、被服糧食等ノ補給ヲ管掌スル諸廠

六、留守部隊

野戰部隊及之ニ附屬スル諸機關ニ適應スル者

七、國民兵隊

國民兵隊ノ種類及兵力ハ臨時之ヲ定メラルルモノトス

以上ノ兵力ハ國防上必須ノモノナリト雖モ財政ノ現状ハ一時ニ此兵力ノ充實ニ着手スル能ハサルノ事情

0026

アリ因テ累ニ御裁可ヲ得タル如ク先ツ明治四十
年度ヨリ十九箇師團及之ニ伴フ諸部隊ノ整
備ニ着手シ殘餘六箇師團ノ常設ハ他日財政
緩和スルノ時ヲ待テ整備ニ着手シ以テ國防ニ要
スル兵力充實ノ完成ヲ期セントス而レテ此十九箇
師團完成後十七年（兵役年限）ニ於テ戰時整
備レ得ヘキ帝國陸軍ノ諸部隊概子左ノ如シ

一 野戰部隊

一 軍司令部

二 野戰師團

三 豫備師團

四 騎兵旅團

五 野戰砲兵旅團

六、山砲聯隊	七、重砲兵旅團	八、野戰電信隊	九、右：適應スル兵站諸部隊及所要、重架橋縱列	二、攻城部隊	攻城、為、要スル諸機關及徒歩砲兵隊 若干	三、後備部隊	一、後備歩兵大隊 七十六個	二、後備騎兵中隊 十九個	三、後備野戰砲兵中隊 (野砲) 十九個	四、後備工兵中隊 十九個	四、守備部隊	一、要塞部隊 十五個
--------	---------	---------	------------------------	--------	----------------------	--------	---------------	--------------	---------------------	--------------	--------	------------

0028

二 對馬警備隊

三 臺灣守備隊

四 樺太守備隊

五 特種部隊

一 鐵道旅團 一個

二 氣球隊 一個

三 軍需隊 若干

四 鐵道船舶輸送・關スル諸部及野戰軍ノ被服糧食等ノ補給ヲ管掌スル諸廠

六 留守部隊

野戰部隊及之ニ附屬スル諸機關ニ適應スルモノ

七 國民兵隊

國民兵隊、種類及兵力ハ臨時之ヲ定メラルルモノトス

海軍

一帝國ノ國防方針ニ從ヒ海軍用兵上最重要視
スヘキ想定敵國ニ對シ東洋ニ在テ攻勢ヲ取ランカ
為ニ我海軍ハ常ニ最新式即チ最精銳ナル一艦
隊ヲ備ヘサルヘカラス而シテ其兵力ノ最低限ハ左ノ
如クナルヲ要ス

戰艦 凡ニ二万噸 八隻

装甲巡洋艦 凡一萬八千噸 八隻

以上ノ艦隊ノ主幹トシ其作戰機能ヲ完カラシムルニ
要スル他ノ巡洋艦及ヒ大小驅逐艦等若若干
隻ヲ附ス

右兵力ヲ國防上ノ第一線艦隊トス

ニ列國海軍ノ趨勢・製造力及技術ノ進步等ニ鑑

0030

且ツ已往ノ經驗ニ徴シ裝甲艦ノ有効艦齡ニ
 十五ト年ヲ三期ニ區分シ竣工後八年迄ヲ第一期第
 九年ヨリ第十六年迄ヲ第二期第十七年以後第二十
 五年迄ヲ第三期トシ而シテ其第一期ニ屬スルモノヲ以
 テ第一線艦隊ノ編組ニ充ツルモノトス
 第二期及第三期艦齡ニ當ル軍艦ヲ以テ豫備艦隊
 ヲ編制シ必要ニ應シ或ハ第一線艦隊ノ増援ニ充
 テ或ハ局地ノ防禦警備等ニ任セシムルモノトス
 局地ノ防禦ニ充ツヘキ小艦艇ノ如キハ艦齡第二期
 第三期ニ屬スルモノヲ以テスルノ外尚ホ多少新造補充
 ヲ要スルコトアルヘシ
 三軍港、要港、防禦港、主要軍需品ノ製造所其他
 諸般ノ設備ハ凡テ前記第一第二項ノ要旨ニ

0031

伴ヲ如ク施設セラルルヲ要ス

四河川通航ノ施艦並漁業保護ヲ目的トスル軍艦
ノ製造ノ如キハ主トシテ政略上ノ必要ニ基キ決定
セラルヘキモノトス

(附言) 本案ハ列國海軍情勢ノ變遷ニ應シ改定
ヲ要スルコトアルヘシ

御參考

帝國海軍ノ主力ハ現在ノ軍艦、現ニ製造中
ニ屬スルモノ及既ニ製造ヲ豫定セルモノヲ
悉ク計上スルトキハ明治四十六年度ノ終リ
ニ於テ概子左ノ如キナルヘシ

戰艦 拾六隻

内

0032

第一期 五隻

第二期 十隻

第三期 一隻

装甲巡洋艦 拾七隻

内

第一期 七隻

但し内三隻は約一萬四千噸

第二期 十隻

○帝國軍ノ用兵綱領

一、我國防方針ニ從テ作戰スル帝國軍ハ攻勢ヲ以テ本
領トス乃ケ海軍ハ敵手ニ對シ努メテ機先ヲ制シ
其海上勢力ヲ殲滅スルコトヲ目的トシ陸軍ハ敵ニ
先ケテ所望ノ兵力ヲ速カニ一地方ニ集合シ以テ

0033

先制ノ利ヲ占ムルヲ目的トシテ作戰ス故ニ海軍ヲ以
テスル我沿海都市嶋嶼及一般商船航路等ノ防
護ハ此要旨ニ背馳セサル範圍内ニ於テ實施セラ
ルモノトス但シ下關海峽ト釜山馬山浦間ハ常ニ確
實ニ之ヲ防護セシコトヲ期ス

臺灣、樺太ニ於テハ其守備隊ヲシテ通常獨立ノ防
禦ニ任セシメ又諸要塞ハ通常海軍ノ防備部
隊ト相待テ防禦配備ヲ取ルモノトス

ニ將來衝突ノ危險最も多キ露國ヲ敵トスル場合ニ
於テ帝國軍ノ作戰ハ左ノ要領ニ從フヘシ

海軍ハ先ツ東亞ニ在ル敵ヲ求メテ攻撃シ且ツ朝
鮮海峽ヲ制扼セシコトヲ期ス

敵ノ海上兵力浦塩斯德方面ニ引退スルトキハ我

ハ其間接封鎖ヲ勵行シ以テ黃海ニ實施セラル
ヘキ我陸兵ノ輸送ヲ防護セントス

黃海方面ニ於ケル陸兵ノ輸送ハ開戦ノ初期ヨリ
實施セラルルモノナリ然レトモ情況ニ因リテハ多少ノ安
固ヲ缺クコトアルモノトス

注意、輸送ノ安全ヲ謀ル為メ韓國西岸ニ
於ケル避泊地ノ施設並海陸通信機
関ノ整備ヲ要ス

陸軍ハ滿洲、烏蘇利及韓國ヲ作戰地ト為シ本
作戰ヲ滿洲ニ支作戰ヲ烏蘇利方面ニ誘ク之
レカ為メ勉メテ速ニ陸軍ノ大部ヲ南滿洲ノ一
地方ニ一部ヲ韓國咸鏡道ノ北部ニ集合シ後
敵ヲ求メテ之ヲ攻撃ス而レテ如何ナル場合ニ在

テモ 韓國ハ敵ノ蹂躪ニ委セサルコトヲ期ス

韓國咸鏡道北部：陸兵ヲ輸送スルコトハ陸上

交通機關ノ完備セサル間ハ海戰ノ進捗ヲ待

タサル一カラス 故ニ平時ヨリ該方面ニ適當ノ施

設ヲ為シ以テ敵ノ進入ヲ防止スルノ方法ヲ講セ

サルヘカラス

作戰ノ進捗ニ應レ浦塩斯德ヲ攻略セントスル

時ハ陸海兩軍相策應レテ成効ノ速カナラシムコト

ヲ期ス

三、米、獨、佛ノ各一國ヲ敵トスルノ已ヲ得サル場合ニ遭遇

セハ先ツ敵ノ海上勢力ヲ撃滅スルヲ主眼トシ嗣後

ノ作戰ハ臨機之ヲ策定ス

四、日英同盟協約：基キ英國ト協同シテ戰爭スル

0036

場合ニ在リテハ共同ノ敵ニ對シ互ニ相策應シ友軍
全体ノ利ヲ謀ルヲ目的トシテ作戰スヘシト雖モ相
互ノ計畫ニ於テハ直接ノ聯合作戰若クハ陸兵或
ハ艦艇等ヲ以テスル直接ノ援助ヲ期待セサルヲ要ス
五、日英同盟協約ニ依リ露國ニ對シテ日英互ニ援助ス
ルノ作戰ハ尤モ要領ニ從フモノトス
我ヨリ英國ノ援助ヲ與フル場合ニ在テハ帝國軍ハ
第二項ノ要領ニ從テ作戰スルモノトス
英國ヨリ我ニ援助ヲ與フル場合ニ在テハ其陸軍ヲ
シテ印度方面ヨリ土耳其斯坦方面ニ何テ牽制ノ
作戰ヲ為サシムルコトヲ期待シ其海軍ニ向テハ第
四項ノ要領ニ從テ作戰スヘキコトヲ要求ス
六、日英同盟ヲ以テ露獨、露清若クハ露佛聯合ニ對スル

時ハ左ノ要領：從フモノトス

我海軍ハ第二第四項ノ要領：從ヒ敵ノ東洋艦隊：對シテ攻勢ヲ取ルヲ期スト雖モ黃海：於ケル陸兵ノ輸送ハ常ニ為シ得ヘキモノト期待スヘカラス
我陸軍ハ概テ第二項ノ要領：從テ作戰スヘシト雖モ咸鏡道方面：作戰スル兵力ヲ減シテ他：使用スルコトアルヘシ

七、帝國陸海兩軍ハ本綱領：基キ毎年作戰：關スル計畫ヲ策定シ參謀總長、軍令部長相互協議シテ案ヲ具シ裁可ヲ奏請ス

(附言) 本綱領ハ將來形勢ノ變遷ニ應ジ改定セ

ラルヘキモノトス

參謀總長、海軍軍令部長奉答ノ結果内閣總理大

0038

臣ハ帝國國防方針ヲ審議スヘキ勅命ヲ拜シ又特
ニ國防ニ要スル兵力ノ内覽ヲ許サレ明治四十年三月
左ノ如ク奉答セリ

奉 答

臣公望 謹ミテ奏ス伏テ惟ルニ開國進取ハ帝國ノ國
是ニシテ施政ノ方針亦一ニ此ニ基キ終始一貫敢
テ渝ルコトナレ是ヲ以テ内治ニ外交ニ苟モ帝國ノ光
烈ト國民ノ忠良ニシテ勇進ナル氣性ヲ中外ニ發
揮セシムルノ政策ハ前ヲ繼キ後ヲ啓キ永ク相傳ヘ
テ之カ美果ヲ收ムルヲ勗ムヘキハ論ナキ處ナリトス
帝國カ從來如上ノ政策ニ依リ幾多ノ苦心計營ヲ
經テ獲得シ来リタル現時ノ地位ト利權トハ將來
益々之カ振張ヲ謀テサルヘカラス帝國カ滿韓地方ニ

0039

有スル利権及太平洋ノ彼岸ニ於ケル我民力ノ發展
、如キ將來益ニ發達セシムルヲ期ス此、如キ帝國ノ膨
張ニ對シ我平和ノ政策ヲ阻礙セントスル國アルニ方
リ克テ我國ノ主張ヲ貫徹シ以テ大成ヲ前途ニ期セ
シハ軍備ヲ充實シテ列強ノ間ニ重キヲナシ宇内ノ雄
鎮タルノ實力アルヲ要ス

今ヤ宇内ノ列強ハ各利権ノ擴張ヲ以テ政策ノ主眼
トナシ營々トシテ止マル處ヲ知ラス若シ一朝利害相
衝突シ互ニ讓ラサルニ於テハ或ハ不測ノ變亂ヲ起ス
ナキヲ保セス此時ニ際シ我國國防ノ方針ヲ立テント
スルニハ各國外交政策ノ大勢ヲ達觀シ各邦兵備
ノ狀況ヲ洞察シ緩急其塩梅ヲ愆ラサルヲ要ス惟
ルニ帝國ノ國力ヲ以テ歐米列強中二三ノ同盟聯合ニ

0040

對シ軍備ノ優越ヲ望ムハ誠ニ難事ニ屬ス是ヲ以テ外交ニ於テ一方ニハ同盟與國ノ交誼ヲ益ニ親厚ナラシムルコトヲ謀リ一方ニハ帝國ト利害ヲ異ニスル國際間ノ聯合ヲ極力防止スルノ政策ヲ執ラサルヘカラス而シテ國防ニ關スル方針ニ付テハ參謀總長及海軍軍令部長ノ見處誠ニ其正鵠ヲ誤ラズ其計畫亦遠算ナキヲ認ムルヲ以テ後來之カ完成ヲ期ス然レトモ我國財政ノ情況ハ大戰役ノ後ヲ受ケ今俄カニ之カ全部ノ遂行ヲ許ササルモアリ願フハ暫ク假スニ時ヲ以テシ國カト相俟テ緩急ヲ參酌セシメラレシコトヲ臣公望誠惶誠恐頓首頓首

同年四月三日 先帝陛下ハ侍從武官長岡澤大將ヲ
レテ山縣元帥ニ內閣總理大臣奉答ノ旨ヲ傳達セシメ

テレ又同年四月十九日上記關係書類悉皆ヲ各元帥
閱覽セシメラル右終リテ後山縣元帥、四元帥ヲ代表
シテ左ノ如ク奉答セリ

奉 答

參謀總長、海軍軍令部長、連署奏對セル帝國國
防方針ハ内閣總理大臣ノ同意セル如ク内外ノ形勢
ニ應レ帝國ノ國是ニ合スルモノトス而レテ之ニ伴フ國
防ニ要スル兵力及帝國軍ノ用兵綱領ハ我國ノ財
政ヲ顧慮シ善ク帝國ノ利權ヲ保護スルノ道ヲ
求メタルモノニシテ目今ノ國力ニ照シ至當ノ策案ナ
リト認ム若シ夫レ國防ニ要スル兵力ニ至ラハ内閣統
理大臣ノ奏上セルカ如ク自今益々資源ノ培養ニ
勉メ可成速ニ所望ノ數ニ達センコトヲ期セサルヘカ

0042

ヲス

臣等、卑見上陳、如レ別冊帝國國防方針、國防
ニ要スル兵力及帝國、用兵綱領ハ之ヲ當局ニ下
シ内外施政、機宜ヲ制シ國防用兵ノ基礎ヲ固
フセラレシコトヲ請フ

右謹テ復奏ス誠恐誠惶頓首以聞

斯ノ如クシテ參謀總長、海軍軍令部長ノ奉呈セル帝國國
防方針、國防ニ要スル兵力、帝國軍ノ用兵綱領ハ總テ
御嘉納アラセシレ陸軍大臣、海軍大臣ニモ亦此旨ヲ傳
達セシメラレタリ

參謀總長及海軍軍令部長ハ侍從武官長ト協議シ
將來ノ為メ御沙汰傳達ノ次第覽書ヲ左ノ如ク作為セ
リ

御沙汰傳達次第覽書

明治四十年四月四日午前侍從武官長岡澤大將

聖旨ヲ奉レテ海軍軍令部長東郷大將參謀總長
代理參謀本部次長福島中將ヲ宮中ニ召喚シ侍
從武官長室ニ於テ左記御主旨ノ 聖旨ヲ傳達
セラル

日本帝國國防方針、國防ニ要スル兵力、帝國軍ノ
用兵綱領ハ總テ御嘉納アラセラル

曩ニ内閣總理大臣ニ下附シテ審議セシメラレタル日
本帝國國防方針、國防ニ要スル兵力ニ關シテハ別
紙寫ノ通り適當ト認ムル旨奉答セリ 聖旨
依リ一應閱覽セシメラル

海軍軍令部長、參謀總長代理ハ一應侍從武官長

0044

ヨリ示サレタル内閣總理大臣ノ奉答書ヲ閱讀シ御
沙汰ノ主旨ヲ体シテ退出セリ

附記 寺内陸軍大臣ハ同年四月二十日齊藤海

軍大臣ハ同年二十二日侍從武官長岡澤

大將ヲ以テ各前記ノ通り御嘉納ノ次第ヲ

傳ヘシナラレタリ

0045

